

旗本宇津家知行所仕法の請負について

報徳仕法の歴史的評価の方法をめぐって

阿部 昭

はじめに

宇津家知行所仕法は、二宮金次郎が請負い執行した一連の「報徳仕法」のなかでも、その源流ともいべき仕法として特に注目されることから、報徳仕法の歴史的評価を行う上で、きわめて重要な位置を占めるものと言つて過言でない。「報徳仕法」研究全般の流れから見れば、最近も各仕法についての着実な研究が積み重ねられつつある^①。しかし、宇津家知行所仕法に限れば、歴史学的実証研究の数は意外に少ない。さきの上杉允彦・大塚英二両氏の研究、最近では舟橋明宏、早田旅人、紺野浩幸氏の研究が、同仕法について論及した数少ない研究といえる^②。

これらの研究を踏まえても、宇津家知行所仕法をはじめとする、報徳仕法研究は、当面する研究の視点として、次の二つの課題を明確に分けて考察する必要があると考えている。その一つは、仕法を実施する主体の形成のされ方、社会的位置づけの問題である。領主から仕法

を依頼され請け負う二宮金次郎を中心に、それを補佐する門弟（随員）たちと、これに仕法を依頼する当該藩あるいは知行所との関係、これらは各仕法ごとに主体の形成の仕方、性格を異にしている。そこで実態に即して具体的に検証する必要がある。同時に依頼する側と受諾する側と、両者の関係が近世領主支配の構造の下で、いかなる意味を持っていたか、についても検討する必要がある^③。

二つめは、実施された仕法の内容を、仕法実施の目的（ねらい）・方法（手段）・実績（成果）ごとに、実態に即して正確に評価することである。報徳仕法は地方農政の総合施策として実施されるが、所領ごとに仕法の実施過程と内容を異にすることから、各の仕法に即した慎重な見極めが必要である。この二つの課題は、いずれの仕法地でも実証的に検証されるべき事柄であるが、特に初発の宇津家知行所仕法では、厳密な検証を必要とすると考える。報徳仕法の理念、二宮尊徳の思想の独自性を認めつつも、その特長から仕法を論ずるのではなく、先ず上記二つの視点を区別しながら客観的に仕法の実態を見極める実

証的作業が、研究方法として優先されるべきと考える。

小考では、宇津家知行所仕法（ひいては報徳仕法）について歴史的評価を試みる前提作業として、前述の二つの課題のうち、仕法を二宮金次郎が請負受諾する経緯を実態に即して究明することで、仕法開始時の環境がいかなるものであったか、仕法実施条件の整備に二宮金次郎がいかに主体的にかかわり、仕法の契約への領主側の対応はいかなるものであったか、を考察したい。

一 仕法開始に至る経緯

1 旗本宇津氏の事績と所領

宇津家知行所は、下野国芳賀郡横田村・物井村・東沼村の三か村、石高約四千石から構成される。もともと小田原藩大久保家（相模国十一万三千石）の領地であったが、元禄十一年（一六九八）に大久保家から分家した旗本宇津氏の知行所となった。在地の出張陣屋が物井村内の桜町にあったことから、後世「桜町陣屋」「桜町領」などと呼ばれた。知行高四千石といえは上級旗本と言えるが、近世領主の所領としては極小、零細規模の領地である。

幕府老中を務めた小田原藩主大久保忠朝が、元禄十一年に隠居し、跡を嫡男忠増が相続した際、次男教寛と三男教信にそれぞれ六千石と四千石が分知され、旗本として分家独立した。このとき三男教信は大久保氏がもとは宇都宮氏の出であるという由緒から宇津氏を称した⁴。分家前から將軍綱吉の中興小姓を務め、従五位下出雲守を称し、元禄

十三年の大猷院五十回忌大法要で「御忌般物之役」を勤め、同十五年に小姓組番頭、同十六年に書院番頭と番方の役職を歴任し、宝永二年（一七二五）に御側詰となり「乗輿御免」の榮譽を受けた。翌三年に江戸愛宕下広小路に上屋敷を拝領、同四年には下渋谷に下屋敷、同五年に下屋敷に「揚場」を拝領するなど、將軍綱吉から厚遇を受けた。宝永六年正月に綱吉が薨去すると「御側詰御免」となり、一度は寄合に退いたが、同八年には將軍家宣の下で大番頭の要職に就き役料一千俵を拝領した⁵。

正徳二年（一七一二）に幕府が編纂した「御家人分限帳」（内閣文庫本）では、当時二人の「大御番頭」のうち大名は一名のみで、他の一人はすべて旗本であったが、そのなかに「大久保奎入子 宇津出雲守 丑四十九 四千石、外千俵御役料 下野」とあるのが宇津家初代の宇津教信である。「大久保奎入」とあるのは大久保奎之助、すなわち小田原藩主大久保加賀守忠朝のことである。他の旗本一人のうち関東以外に知行所を有する者は三人で、他はすべて江戸の周辺に知行所を持つ旗本であった。当時大番頭を務めていた旗本の知行高をみると石高五千石以上は六人で、かれらには役料は支給されていない。五千石未満の者は宇津家も含む五人で、かれらには所領のほかに役料が一千俵ずつ支給されていた。大番頭の役料は、寛文期には二千俵であったが、正徳年間には一千俵となっている⁶。

「御家人分限帳」にみる宇津出雲守教信は、下野国に石高四千石の知行所を与えられた「国付」地方取りの旗本であるが、これに加え役

料として切米一千俵が大番頭に在職する期間だけ、手当として支給されていた。役料として支給される切米一千俵は、これを仮に知行高に換算すれば、約一千石に相当するから、大番頭在職中の教信は知行高五千石の待遇を受けていたのと同等となる。役職に就くか就かぬかは家の格式に変わりはないにしても、収入上から見れば大きな違いがあり、上級旗本にとっても重大な問題であった。

教信は、大番頭を勤めていた正徳二年（一七一二）のうちに、二条在番を命ぜられ、黄金五枚他を拝領したが、同四年には「大番頭御免」となり寄合に退いた。しかし、享保九年（一七二四）には、將軍吉宗のもとで数寄屋橋御門番となり、同十四年に隠居退任するまで、その職にあった。

教信の跡を継いだ宇津家二代目当主、教達も宝永七年（一七一）に本家大久保家から養子として迎えられた。先代教信に子がなかった訳ではないが、本家小田原藩大久保忠増（教信の兄）の末男で、教信の甥にあたる教達「養子」となり、一年後に將軍「御目見え」を許され、その九年後に宇津家の家督を相続した。実子があってもその子に跡を嗣がせず、本家大久保家から養子を迎えて嗣がせるだけの十分な理由が宇津家にはあった。小田原藩大久保家は譜代の藩であり、教信の父、大久保忠朝は隠居する直前の元禄十一年二月まで幕府老中を務め、跡を継いだ兄の大久保加賀守忠増も宝永二年（一七五）九月から正徳三年（一七一三）七月まで老中在任、特に宝永五年以後は勝手掛老中を務めていた。教達の養子縁組みは、こうした環境の下で行

われ、本家の権勢を味方に付け、その庇護の下に入ることは宇津家の成り立ちを考えれば重要なことであった。

教達は家督までもない享保十六年（一七三一）に浜大手御門番を勤め、同十八年には駿府御加番、元文二年（一七三七）に虎之御門番、寛保三年（一七四三）雉子橋御門番、寛延三年（一七五）筋違橋御門番、宝暦十一年（一七六一）に数寄屋橋御門番を勤めるなど、同十三年に病死するまで、居屋敷類焼で一時役を退いた時期を除き大番組の諸役を歴任した。

続いて宝暦十三年（一七六三）に三代当主となった教朝は二代教達の実子で、宇津家として初めて養子でない嫡男が父の死後家督を相続した。教朝も家督までもない明和三年（一七六六）に父祖伝来の大番組の勤役である駿府御加番を勤めている。しかし、ここから後が異なり、教朝は翌年勤めを終えて駿河から帰国した後、寛政十一年（一七九九）に病いを理由に隠居するまで三、有余年間、目立った幕府の役職を一度も勤めなかった。初代から二代目当主までの業績と比べれば雲泥の差である。この間、天明六年（一七八六）に知行所の水害を理由に幕府から金六百両を拝借した。後述の通り、この時期、宇津家の財政は極度の貧窮状態にあった。それに洪水の被害が拍車を掛けた。家譜によれば、寛政十年（一七九八）、それまで上屋敷を置いていた愛宕下の屋敷を毛利讃岐守政美（長門国清末）と「相對替え」し、芝切通し御掃除町西之久保（港区芝公園三丁目）に屋敷替えした。新屋敷は現在の港区桜田通り西久保八幡神社の向かい側で芝給水所公園南側の辺

りである。宇津家の衰運急なる状況下での転居であり、しかも「相對替え」である。屋敷交換の背景に金銭上の理由も推定される。

つぎの四代目当主教長も実子で、寛政元年（一七八九）、すでに將軍御目見えを済ませていたことは分かっているが、その後は家譜のどこにも、いつ家督相続したか記されておらず、享和三年（一八一三）六月に病死するまで、およそ一 数年の間に何一つ公的事績がない。旗本として幕府に奉仕する役職を何一つ果たした記録がない。四四、五歳で没したが妻帯もしていなかった。後に養子から五代当主となった

宇津釦之助が遺した履歴には、義父教長について、「養父大学（教長）寄合之節、病氣差し重り候処、男子無御座候」とあり、教長が非役であった上に妻帯もせず、継嗣を持たなかったことが記されている。⁷

大番組に属し大番頭も勤める家格でありながら、さしたる役職にもつげず、旗本としての日常の御用も勤められなくなった宇津家衰勢の原因は何か。初代教信のように要職に就き、幕府から支給される役料収入を得られなくなったためか。それとも財政の困窮が根本の原因で伝統の番役勤めを果たし得ないためか。当主の病氣・力不足の結果が詳らかではない。おそらくは、これらの諸要因が相互に作用しあい、宇津家の衰勢をくいとめられなくしていたのであろう。

いずれにせよ、旗本宇津家が家勢を保ち続けたのは、二代目当主教達の時時代までだった。教達の時時代も後半（宝暦期）になると衰勢の兆候が現れ、三、四代と代を重ねるごとに衰勢はいよいよ顕著となった。

後に宇津家が作成した報告書が、「古しへ御高四千石余にて、御収納

米三千百俵余相納、家数四百有余有之候処、去ル文政度御趣法之始、御収納米拾ヶ年致平均見候処、漸米九百三拾俵余、家数百四拾五軒、夫連も他領出稼、或は極難困窮人、今日も凌兼候⁸と述べるのとおり、ほぼ一世紀余の間に宇津家知行所の戸口と租税収納高は、ともに享保期の三分の一まで急減していた。原因・結果の区別はともかく、当主の事績に見られた家勢の衰退は、知行所の戸口・租税収納高の急減と併行し、相関連し発生していたのである。

教信の分家独立から百有余年が経過した一九世紀の初頭、享和三年（一八一三）九月、宇津家の家督を相続した五代目当主、宇津釦之助は宇津家の衰退窮まった時期に、親戚筋の旗本大久保忠彦家（甚右衛門、三千石、寄合、永田馬場）から養子に迎えられた。実父忠彦は小田原藩大久保加賀守忠由の次男で、はじめ弥市と称し、後に一族の旗本大久保教和の養子となり家督を相続した。釦之助を養子に出した大久保家は兄の甚右衛門が嗣いだと思われるが、その後の事績は詳らかでない。

宇津家が本家大久保家から分家した直後の元禄十二年（一六九九）から、五代目宇津釦之助の時時代、幕末の嘉永六年（一八五三）に至る約一五 年余りは、江戸中後期の重要な期間である。この期間の宇津家知行所三か村の家数・人数・馬数の増減を見るため表1を作成した。この表が示す約一世紀半に渡る期間のうち、その中間の享保から文政に至る期間の変化は詳らかでない。しかし、その前後の元禄・享保期、文政・嘉永期の動きから、中間にある享保・文政期の推移もおおむね

推定できる。

表1によれば、宇津家知行所三か村の家数・人口は、元禄 享保期にはまだ目立つた変化をみせない。だが享保期と文政期を比べると、これが同一の知行所かと目を疑うばかりの激減である。この間、家数は三六%、人数は三三・三%に減少している。

享保期以降実施された幕府の人口調査を見ると、おしなべて江戸中期の日本の人口はやや停滞気味である。そのうちでも北関東の下野・常陸両国は、一八世紀半ば以降、特に宝暦・明和の頃から家数・人口の急減が現れ、特に天明飢饉後に拍車がかかり、寛政・文化期の領主仕法によっても戸口減少は止まらず、化政期から天保期まで減少が続き、ついに享保期の四割台まで落ち込む。これを「関東農村の荒廃」と称す。宇津家知行所三か村の衰退は、こうした常陸・下野両国の一般的傾向を上回る激減を見せる。

前表で注目すべきことがもう一つある。文政五年（一八二二）から嘉永六年に至る約三 年間の推移を見ると、この間、宇津家知行所の家数は約一・二倍に、人数は約一・五倍に増加するなど、顕著な戸口の回復傾向が現れている。常陸・下野両国で一般に見られる天保飢饉時の下落もここでは見られず、ゆるやかであるがたいへん順調な戸口の回復傾向が特徴的に見られる。文政五年以前に見られた減少傾向の激しさに比べ、文政五年以降の回復の順調さは好対照をなしており、この間に実施された宇津家知行所仕法の効果を、戸口変化の側面から裏付けているのである。

表1 宇津家知行所3か村家数・人数・馬数の推移

	家 数					人 数			馬 数
	家数	名主	組頭	本百姓	水呑	人数	男	女	
元禄 12 卯	422 軒	6 軒	13 軒	239 軒	160 軒	— 人	— 人	— 人	218 匹
享保年中	433	—	—	—	—	1915	1067	848	—
文政 5 午	156	7	9	139		749	394	355	65
文政 10 亥	159	6	12	140		769 (28)	404	365	65
天保 3 辰	164	5	11	147		828 (1)	420	408	65
天保 8 酉	173	5 (1)	12 (1)	153		857 (18)	425	432	65
天保 13 寅	180	5 (1)	13 (1)	159		963 (1)	481	482	65
嘉永 6 丑	187	7	13	166		1103	568	532	65

五

註 各年次の典拠史料は下記の通り。

「元禄十二卯年桜町領三か村差出帳」（『全集第十巻』133頁）、「三か村前々高免御収納米永取調帳」（『全集第十巻』240頁）、「文元五年宇津家古今雑書集」（『全集第十巻』71頁）、「文政五年年三か村宗門人別改帳」（『全集第十巻』439頁）、「文政十亥桜町領三か村宗門人別改帳」（『全集第十三巻』1021頁）

名主項目の（ ）は名主格、組頭項目の（ ）は取締役の軒数、人数項目の（ ）は、取立百姓または他領からの入百姓を示す。

元禄12卯年と享保年中の「-」は、史料の記載に欠落部分があることを示す。

2 宇津家財政の窮乏と負債の累積

一八世紀半ば以降の宇津家知行所の推移を、先ず戸口の変化から觀察したが、次に比較的よく残されている貢租関係資料を用いて、検討を加えよう。

表2は、戸口の激しい減少が見られた享保 文政期における宇津家知行所三か村貢租収納高の推移を示している。これによれば享保年間の宇津家知行所三か村の貢租収納高は、田方が米一五三石二斗六升六合余で、これを俵数に換算し米三一六俵三斗四升六合余となる。畑方は、小物成も合わせ永二 二貫四五文と計算され、金に換算して金二 二両一分二朱と永七 文となる。享保年間の田方収納高を約米三一 俵余とみることは、別の史料（後掲表3）からも裏付けられるからの外れな数値ではない。

高四千石の宇津家知行所の田高は、約二千五百石と概算されるので、これを仮に物成五つ取り（五公五民）で試算すれば、田方収納高は米一二五 石、これを四斗入りで俵にすれば、およそ三一二五俵ほどになる。こうしてみると享保期までの宇津家知行所は、田方でもまだ充分な貢租徴収力を保持していたといえるが、同時に、享保期にこれだけの課税がなされていたのだとすれば、かなりの高収奪がなされていたことも裏付けられる。

引き続き表2によれば、その後、寛政元年（一七八九）の田方収納高（取米）は一七二三俵三升五合と享保期に比べ四割強（四一％余）まで激減する。畑方収納高（取永）は金一七四両一分と京錢一貫二四

表2 享保年中 - 文政5 午年 宇津家知行所物成勘定の推移

	享保年中物成勘定	寛政元酉年物成勘定	文化4 卯年物成勘定	文政5 午年物成勘定
石高	高 4109 石 128			高 4000 石 内 867 石 743 前々荒地引 残高 3139 石 257
反別 家数	5010 反 8-20 433 軒			156 軒
田方	米 1153 石 26628 此俵 3116 俵 34628 (口米共)	米 1273 俵 035	米 929 俵	米 254 石 75 此俵 688 俵 21 但し 1 俵 3 斗 7 入り
畑方	永 202 貫 445 此金 202.1.2 ト 永 70 (口永・小物成共)	永 此金 174.1.0 ト 京 1.240	永 此金 163.3.0 ト 銀 2.4	永 127 貫 917.9 此金 127.3.0 ト 京 672
大豆		大豆 54 俵 0054 此金 12.2.2 ト 錢 0.036 文	大豆 54 俵 005 此金 6.2.0 ト 銀 5.2	大豆 54 俵 005
苳		苳 9 俵 589 此金 8.0.0 ト 錢 0.337 文	苳 9 俵 589 此金 6.2.0 ト 銀 5.2	苳 9 俵 589

註 典拠史料は、「三村前々高免御取納米永取調帳」『全集第十巻』240 頁、「酉年御物成米金御勘定帳控」『全集第十巻』11 頁、「享和三亥-文化五辰年銀之助儀御暮方元払差引帳」『全集第十巻』59 頁、「文政五午年寄目録控」『全集第十巻』838 頁。

文となり、これに小物成の大豆金一二両二分二朱余、荏金八両余を合わせて金一九五両余となり、これも享保期に比べ大幅な減少である。しかし、下落の程度は田方ほど激しくはなく、貢租高の低落は田方を中心に起きていたことが分かる。

さらに文化四年（一八七）の状況を見ると、田方取米は九二九俵と、またも減少（享保期の三割弱）、畑方取米は金一六三両三分と銀二匁四分、大豆金六兩二分と銀五匁二分、荏六兩二分と銀五匁二分で、畑永と小物成を合わせて金一七七兩前後であるから、これも減収が進行している。文政五年（一八二）には田方取米は、ついに六八八俵余、畑永は一二七兩三分となり、これに小物成分の一 数兩を加えても、およそ金一四 兩前後となるから、享保期に比べれば、田方は二割二分まで減り、実に四分の一以下となる。小物成を含む畑方も六割九分まで減少している。

このような田畑収納高の減少は、宇津家知行所財政に大きく影響する筈であるが、何時から何が原因でこのような減収が発生してきたのであろうか。享保期以降の知行所三か村の田方取米高の変化を詳細に検討するため、次の表3を作成した。享保十一年（一七二六）の各村の田方取米高から名主給を引き、口米を加えた数値を算出すると、東沼村は米八六四俵二斗七升三合、同じ条件で横田村の取米高は米七六二俵一斗五合、物井村は米一四七四俵二斗一升一合であった。これをそれから三十七年後の宝暦十三年（一七六三）と、四五年後の明和八年（一七七二）の取米高と比べてみると、三か村合わせた数値では、宝

暦十三年が米二三一七俵一斗四升八合余、享保期に比べ米七八四俵余（二五%余）の減少、明和八年は米九八一俵余（三二%弱）の減少となる。三か村それぞれの村別収納高も軌を一にして減少しており、しかも前述の戸口急減とも相關関係にあるように見られる。

また、表3で注目されるのは、三か村からの収納高が年を追って減少してきたことだけではない。享保十一年にはまだ一件もなかった取米「引き」の記載が、宝暦十三年から明和八年にかけて多数現れるようになっていくことに注意しなければならない。

まず、宝暦十三年に記載されている取米引きの実態を見ると、それらは「宝暦七丑洪水荒地引」「当未風損引」のように、特定の年に発生した災害を起因とする「洪水引き」「風損引き」「用捨引き」「延べ米引き」等であり、一過性の性質を多分に持つ臨時の減免措置として記載されているものである。これは種々の減免措置が急速に増加し始めた時期の状況を典型的に示している。

ただ注意すべきは、そのなかにも「余荷用捨引き」「欠落百姓用捨引き」「荒地引き」が若干含まれていることである。「余荷」は年貢上納力をなくした者の未納年貢分を、他者が身代わり負担し代納（弁納）することである。「欠落百姓」は田畑耕作を放棄して逃亡した者である。「余荷用捨引き」や「欠落百姓用捨引き」は、代納負担者に対する負担軽減措置として登場しているものであるから、これらの「用捨引き」が見られることは、すでにこの時期、知行所三か村にかなりの担税不能者や欠落者が発生していたことを物語っている。

表3 享保11年 - 明和8卯年の宇津家知行所3か村取米納辻

	享保11年	宝暦13未	明和8卯
東沼村	取米864俵273 当午上納 (名主給引、口米込み)	取米864俵273 内10俵357 宝暦7丑洪水荒地引 162俵12 当米風損用捨引 20俵155 当余荷地用捨引 7俵 来申延米引 1俵1102 巳年洪水荒引 残米662俵2708 当未納辻	取米864俵273 内10俵357 宝暦8寅刈荒地引 1俵11 同12午刈荒地引 117俵179 明和元申荒地引 6俵279 同申物井村越石孫左 衛門荒地引 34俵347 同6丑荒地引 12俵3512 同6丑長命寺田地 半免引 5俵3296 同5子長命寺下賜 免引 52俵0375 同7寅刈荒地引 残米622俵2322 外ニ13俵2694 明和5子刈荒地発返 半面等 合米636俵0318 当卯納辻
横田村	取米762俵105 当午上納 (名主給引、口米込み)	取米762俵105 内10俵1454 宝暦7丑洪水荒地引 147俵 当米風損引 12俵122 当余荷地用捨引 7俵 欠落百姓彦助年貢 用捨引 9俵 来申延米引 残米576俵0434 当未納辻	取米762俵105 内10俵1454 宝暦4丑刈荒地引 139俵077 明和元申荒地引 136俵123 明和3戌刈荒地引 9俵246 明和4亥刈荒地引 48俵1654 明和7寅刈荒地引 残米418俵0882 外ニ55俵309 明和5子年刈 荒地発返半免等 合米474俵0272 当卯納辻
物井村	取米1474俵211 当午上納 (名主給引、口米込み)	取米1474俵211 内9俵299 西谷荒地引 8俵2337 宝暦7丑洪水荒地引 244俵177 当米風損用捨引 117俵017 余荷地用捨引 7俵 欠落百姓半右衛門 用捨引 9俵 来申延米分 残米1078俵2346 当未納辻	取米1472俵2253 内9俵299 西谷荒地引 8俵2338 宝暦4丑荒地引 331俵089 明和元申荒地引 16俵065 明和元申百姓孫左 衛門荒地引 15俵1163 同6丑百姓孫左 衛門荒地引 100俵351 同7寅百姓孫左 衛門荒地引 10俵26 当卯日損用捨引 残米979俵193 外ニ30俵0979 明和5子年刈 荒地発返半免等 合米1010俵229 当卯納辻
3か村	午取米納辻 3101俵189	未取米納辻 2317俵1488	卯取米納辻 2120俵288

註 典拠史料は、「享保十一年東沼村御物成割付帳」(『全集第十巻』167頁)、「宝暦十三年より明和八卯年迄物成勘定帳」(『全集第十巻』157頁)

領主が賦課する貢租を村民が個別に上納しきれない場合、最終的には村共同で請負負担する村請制下では、一部の村民が貢租負担能力を失うと、未納分が残りの村民に転嫁されるため、年貢上納の苦難を倍加させることになる。後掲の伝聞記録の中においても、宇津家知行所の農民たちが、延享年間に「余荷作」の負担を免れようと訴える行動を起こしたところ、領主である宇津家から嚴重に処罰されたらしいことが記されている。

御知行所之儀は土地柄故哉、連々人少致困窮、亡所同様之姿に罷成、凡七八十年以前、延享之度、手余り田致出来難渋仕、既友漬におよび可申哉に付、余荷地作之儀は御用捨被成置、立百姓銘々所持之分致出精作立、御百姓相続仕度段、村々一統願出、頭取仁右衛門儀は、身元闕所、其身死罪被仰付候得共、不得止事、漬百姓荒地弥増候^①

「余荷用捨引き」は、「余荷」を強制する領主である宇津家と、負担を拒否しようとする領民との、こうした対抗関係のなかで、「余荷」分の負担をいくぶんか軽減する妥協措置の一つであった。

また、「荒地引き」は、耕作不能や租税不能を前提としての減免措置であるが、「当 年用捨引き」のような一過性を残した減免から、「年より荒地引き」のごとく、より長期にわたり固定化・恒常化した減免措置へ向けて、知行所村のさらなる疲弊の進行過程で生じてきた現象であった。

前表の明和八年の段階では、「引き」の全体量が増大するとともに、「引き」の理由がほとんど「年より荒地引き」に一元化し、耕作不能地や担税能力が失われ、事実上、「無主地」(所有者の無い土地)化した田畑屋敷の恒常化、固定化が一層進んでいたことを示している。

一方、明和八年の記録には、「明和五子年より荒地発返半免等」の記載がある。「発返」は「おこしかえし」または「おきかえし」であり、荒地の一部が再開発され、耕地として復活していたことを意味している。ただし、再開発された土地には、元の「本年貢」を賦課することはできず、「半免」、すなわち二分の一の減免措置を施した上で、貢租を上納させていたことを示している。急激に荒地が増えて次第に恒常化するとともに、それを少しでも再開発し、一部貢租を軽減したうえで少しでも貢租収入を確保しようとする試みも続けられていたことが分かる。しかし、そうした努力にもかかわらず、表2で見た通り、寛政から化政期にかけて宇津家知行所の貢租収納高はさらに減少し、

一向に立ち直る兆しを見せていなかった。

一八世紀半ばから一九世紀にかけて、江戸中後期の宇津家知行所村々では、戸口が急減し貢租収納高も下落し、担税能力を失った荒地化が進行していた。当然のことながら宇津家の財政は極度に悪化していった。荒地地の起き返しをはじめ種々対策が講じられたが効果はあがらなかった。宇津家当主が後に、「村柄次第に相衰候に付、撫育勤農方無油断世話差加候得共、何分立戻り難く、追々収納相減、家中扶助は勿論、公務にも拘り必至と差迫候」と述懐するように、宇津家は家中の者に支給する「扶持」にも窮する状態に陥り、三代目教朝の明和年間以降、旗本として幕府へ出仕する日常の御用も満足に勤められなくなっていた。宇津家の衰勢は、租税収入の減少にともなう財政の窮迫や知行所三か村の戸口の急減と無関係ではなかった。

表4は、五代目宇津飢之助が当主となった享和三年(一八一三)から文化二年(一八一五)に至る三年間の宇津家財政収支の概要を示している。この表のものになる史料がつけられたこと自体、財政改善の努力のあとを示している。享和三年を例に宇津家知行所収支の構造を概観すると、歳入は田方取米の外、畑永と小物成の大豆・苳の金納分と、門松代と夫中間給金から成り立っている。この年の田方取米高は米一四一三俵一斗一合で、前掲表2の寛政元年の取米高一二七三俵や文化四年の米九二九俵に比べて、かなり良好の収税が行われた年であった。前掲の表3の各時期の取米高と比べると、享保期の取米高三二一余俵の四五%、宝暦一三年の六%、明和八年の六七%となり、い

ずれの年と比べても著しく減収したことは否めない。畑方金納高は、金一六三両三分余で、これに大豆と荏をあわせた小物成金納分を加わえると、金一八七両二分二朱と銀六匁四分となり、享保期の金納高に比べおよそ一五、六両下落しているが、田方取米高のような激しい減収はない。歳入には、ほかに門松代と夫中間給金の上納分が加わる。いずれも以前は現物納であったが、この頃は金納していた。これも加え金納の金額は、金一四両三分二朱と銀二匁二分となる。

歳入の田方取米高一四一三俵一斗一合のうち、約半数の七一五俵二斗七合五匁は払い米として売却され、金二一両一分二朱と銀六・七七匁に換金されている。これは畑方・小物成等を含めた全金納高を上回る金額である。この結果、歳入合計は、米六九七俵三斗余と金四一六両一分二朱、銀七分七厘七毛となる。

これに対し歳出は、米で支給する分(米方)は、「村役人給並江戸方扶持米」の米三五俵三升、「村々開発入用」の米三百俵、「物井村名主並村々子育金」の米四二俵の三つからなる。米方で最大の支払い(支給)項目である「村役人給並江戸方扶持米」は、宇津家当主の生活費と家中に支給する扶持米に、名主給を少々加えたものである。常例の勘定であつて容易には増減しにくい部分である。次に多い「村々開発入用」は、当年実施した荒地再開発の手当経費であり、毎年かならずあるというものではない。現に文化二年以降は歳出のなかにこの項目はなくなっている。「物井村名主並村々子育金」は、報徳仕法導入前に行われていた救恤策で、毎年、五俵前後、多い年は七俵以

表4 享保3亥 - 文化2午年 物成米金収支勘定

	項 目	文化元子年		
		享和3亥年	文化元子年	文化2午年
物 成 米 金	田方取米納金	米1413俵101金163.3.0；銀2.4	米1451俵197金163.3.0；銀2.4	米1176俵116金163.3.0；銀2.4
	大豆納金	大豆54俵此金17.1.0；銀2.3	大豆不作3分2用捨金6.1.2；銀4.4	大豆54俵005此金14.1.2；銀6.3
	荏金納	荏9俵589此金6.2.2；銀1.7	荏9俵589此金5.3.2；銀0.4	荏9俵589此金4.3.0；銀1.4
	村方納門松代	銀7.1此銭800文金17.0.0；銀3.7	銀7.4此銭800文金17.0.0；銀3.6	銀7.4此銭800文金17.0.0；銀3.7
夫 中 間 給 金	取米高	米1413俵10919	米1451俵212	米1176俵12528
	此内弘米	米715俵2075	米906俵3495	米773俵0754
	(石代納高)	此金211.1.2；銀6.77	此金212.1.2；銀3.3	此金188.2.2；銀6.4
	畑方外金納高	金204.3.2；銀2.2	金193.1.0；銀3.2	金200.0.2；銀5.9
歳 入	納合 成替 (残 米)	米697俵30169	米544俵26295	米403俵04988
	(金納)	金416.1.2；銀0.777	金405.2.2；銀6.5	金388.3.2；銀4.8
	物井村名主並村々子育金	米42俵	米47俵	米51俵
	御陳屋中間・老人給扶持	金1.1.0；米4俵17	金1.1.0；米4俵32	金1.1.0；米4俵17
米 金 歳 出	御陳屋詰役人扶持他	金13.1.0；米6俵2	金7.3.0；米5俵075	金11.3.2；銀2.2
	極町勤番種用雑持雇賃同			金0.1.2；銀0.3
	御陳屋入用筆墨紙炭油代	金0.3.0；銀4.8	金0.3.0；銀5.6	金0.3.0；銀6.6
	御陳屋井戸輪伏替代	金0.0.2；銀0.897		金0.3.0；銀0.3
村 役 人 給 並 江 戸 方 扶 持 米	村役人給並江戸方扶持米	米350俵03	米367俵32	米347俵28
	人用金	金369.1.2；銀2.897	金384.1.0；銀7.1	金423.0.2；銀1.2
	村々開発入用	米300俵	米125俵02392	
	村方御應法賃付金		金23.3.0	
御 陳 屋 茶 釜 新 規 調 代	御陳屋茶釜新規調代		金0.0.2	
	村方難済につき拝借金			金52.0.0
	物井村出水堤調査諸入用			金1.3.2；銀3.3
	御陳屋修復入用			金51.0.2；銀6.0
臨 時 調 入 用	臨時調入用	金50.2.2；銀7.47	金55.2.0；銀7.34	
	払合 (払方)	米703俵	米549俵33892	米408俵28
		金435.2.2；銀4.801	金473.3.0；銀1.34	金542.2.2；銀4.6
	収支差額	米5俵09831	米5俵07597	米5俵23012
赤 字 欠 損		金19.1.0；銀0.4044	金68.0.0；銀2.34	金153.2.2；銀7.3

註 典拠史料は、「享和3 - 文化5年 飢之助様御暮方元弘差引帳」(『全集第十巻: 59頁)「文化六巳年 飢之助様御物成米金納仕御入目差引帳」(『全集第十巻: 69頁)

上がこのために拠出されていた。ここにも村柄立て直しの努力の跡が確認されるが、にもかかわらず知行所戸口の減少はくいとめられなかつた。

歳出中の金方(貨幣で支払う分)でも、最大は「村役人給並江戸方

入用金」で、金三六九兩一分二朱と銀二貫八分九厘七毛、その中身は「扶持米」と同様である。次が「臨時御入用」の金五 兩二分二朱と銀七匁四分七厘、これに「御陣屋詰役人扶持他」が続くが、ごく少額である。結果として歳出合計は、米七 三俵、金四三五兩二分二朱と銀四匁八分一毛となる。

この結果、享和三年の収支差額は、米五俵余と金一九兩一分余の欠損（赤字）となっている。当主の家督相続という出費の多い年であったにもかかわらず、この年の赤字は比較的少額にとどまっている。冒頭述べたようなこの年の作柄の良さが田方取米を多く確保できたためか、あるいは養子縁組にともなう持参金などの、記録に計上されぬ臨時収入による処理があつたためか、詳細は不明である。

享和三年と比較しながら、次に翌文化元年と翌々文化二年の収支の構成を見ることにする。取米高は文化元年には微増したが、好条件は二年とは続かず、文化二年は大きく落ち込んでいる。これに対し畑方・小物成他を合わせた金納分はほとんど変化していない。田方取米高増減の影響は、払い米（売却米）の増減となって表れている。文化元年は払い米高が九 六俵三斗四升余と、前年に比べ約二百俵近く大幅に増加した。ところが、それを換金した金高は前年とほとんど変わらないう。豊作で米価が下がったためであろう。文化二年の取米は享和三年に比較し約二四 俵も減収している。しかし、払い米は六 俵ほど多く確保し、享和三年と変わらぬ売価を得た。

この結果、歳入の合計は、米方が文化元年に約二五 俵減少、同二

年には約三百俵近く減少し、歳出に回す米方に余裕がなくなっている。そのためであろうか、享和三年には三百俵を数えていた「村々開発入用」が文化元年には一二五俵余に急減し、文化二年にはなくなっている。両年とも容易に減らす訳に行かぬ「村役人給並江戸方扶持米」は、ほぼ同額の三五 俵前後を確保したが、開発扶助の経費として投入する米の余裕はもはや失われていた。歳入の金方合計は、払い米を増やしたにもかかわらず減少し、歳出に回す資金の余裕もなくなっている。しかし、歳出に大きな比重を占める「村役人給並江戸方入用金」の額はますます増加し、「村方御趣法貸付金」「村方難渋につき拝借金」などの新たな救恤資金が拠出されたため、歳出に占める金方の支出は、文化元年に約金四 兩、文化二年に約一一 兩増大している。このため収支差額は、米方の不足が五俵余と抑えられていたのに対し、金方の不足は、文化元年には金六八兩余、同二年には金一五三兩余と大幅に増大し、容易に補填しきれぬ金額となった。

表4の物成収支勘定で見落としてはならない重要なことが二つある。第一は各年度の赤字欠損額が翌年度の収支勘定に正當に計上されていない点である。欠損分が物成勘定とは別なところで補填されていたことを示す象徴的な事柄である。第二は旗本がたとえ非役であろうと勤めるべき公用勤め（小普請役金、式日登城・対客御用への出仕、田安家稽古への出勤）の経費が歳出に計上されていない点である。当主の病気を理由に宇津家が遠慮を願っていたからである。この二つが計上されるならば、収支の欠損幅はさらに拡大する筈である。それ

が当時の知行所財政の実態であつた。ちなみに、公用勤めに要する宇津家の年間経費は、宇津家四代目教長家督相続時（寛政十二年）の試算によれば、約一五六両ほどであつた¹²⁾。

財政収支の欠損は、宇津家知行所の貢租収入が急激に下降し出した一八世紀半ばから発生していたものと推測される。赤字分は当然何らかの方法で補填しなければ、旗本家政の経営に支障をきたすことになる。当然、旗本の財務を与る用人は資金繰りに奔走せざるをえない。こうした折に、歳入不足を補い赤字を補填する手段として旗本がすぐに頼るのは、江戸で旗本や御家人の蔵米取扱いを生業とする札差（蔵宿）であつた。かれらは旗本や御家人に代わり蔵米を売り捌き手数料を取り、また、知行所から上納される蔵米を担保にとつて金融活動を行い収益を上げていた。旗本が急場を凌ぐため、もつとも気軽に金を借りられる相手であつた。しかし、札差も返される補償のない金は貸さないから、かならず担保を取る。旗本は、次に上納される筈の年貢米を担保とする外に有力な方法を持たない。やむなく翌年の貢租収入を担保とするため、知行所村に年貢先納を命じ、それを担保に前借りする。

表5は、宇津家三代教朝の時代、天明元年（一七八一）に宇津家が江戸京橋因幡町の商人境屋弥兵衛から借り入れた負債の一覧である。安永九年（一七八一）の十二月から数回に分け、知行所村々が境屋弥兵衛から借金をした状況が分かる。借り主はすべて知行所村々となっているが、実は村が翌年の年貢米を担保として借金し、その金を宇津

表5 天明元丑年 宇津教朝代の江戸京橋因幡町 境屋弥兵衛借入金

年 月	借 用 金 額	借 主
安永9年12月	金50両	横田・東沼・西物井・下物井村 3か村名主・組頭・百姓代
同	金51両2分ト銀12匁2分	東沼村請小前
同	金51両2分ト銀12匁5分	両下物井村請
安永10年正月	金47両1分	同
同	金47両1分	同
同	金47両1分	東沼村請
同	金47両1分	同
安永10年3月	金52両ト銀14匁	西物井村請
安永10年4月	金50両	横田村請
天明元年4月	金55両	西物井村請
同	金50両	横田村請

註) 「天明元年五月江戸御借用方控」『全集第十巻』30頁

家に先納したものである。実質は宇津家が境屋から借りたものと同じである。右の表を作成する典拠とした「天明元丑年閏五月江戸御借用方控」という史料の表紙には、「江戸京橋因幡町境屋弥兵衛掛り 愛宕下栄寿院共に」という添書があり、第一回の借用時に宇津家知行所三か村から栄寿院宛に差し出した次の借用証文が転写されている¹³⁾。

借用申金子之事

一、金五拾両者

但、文字小判也

右は御寺御祠堂金之内、此度地頭宇津権五郎様より、来秋物成先納被仰付候得共、出来不仕候に付、無抛御世話之儀、御頼申入、四千石之惣村方へ借用申所実正也、(後略)

これによると、現実には宇津権五郎(教朝)から知行所村に先納金が賦課され、その資金を得るため栄寿院の祠堂金から借り入れようと口入れ世話を栄寿院院主に申し入れた、との趣旨である。この証文が右の借用方控に収録されているのは、境屋弥兵衛が栄寿院祠堂金の有力な金主だったからであろう。栄寿院について詳細は不明だが、右の控帳の表紙に、「愛宕下」とあることから、まだ当時愛宕下にあった宇津家の上屋敷から近い距離にある芝愛宕山(港区愛宕一丁目)周辺に多数あった寺院の一つであると推定される。

この控帳には、借金返済の実態が記されていないため、すべてが独立した借入金であるか、それとも前にした借金が返済されないまま、借り換えされた分を含んでいるのか明瞭でないが、村や年月の違いから、少なくとも境屋が知行所村に数百両の貸付を行っていたことは否定できないであろう。

さらに、宇津家三代の教朝が隠居し、四代目教長が家督を相続した頃、寛政十二年(一八一八)に宇津家が一年間の歳出を積算し、当時抱えていた借金とその返済方法について記した帳簿がある。この史料から表6を作成した。幕府公金である小田原宿助成金の借り入れと返

済方法をも含め、当時宇津家が抱えていた負債のうち一四件分の借り入れ金について、それぞれ「借り入れ先」「当申年の返済方入用」「借入金高及び返済方明細」等を記している。当時の負債全額かどうか不明であるが、そのなかには前述の境屋弥兵衛や栄寿院と同一の借入先であろうと推定される「境や弥左衛門」からの金二百両や栄寿寺からの金百両の借り入れもある。

この帳簿から当時の宇津家の借り入れ状況を見ると、全体として比較的少額の借金と見えるが、実はほとんどが従来の返済方法を見直され、無利息の年賦返済とされ、新たに寛政九年からの五か年計画で少額宛の返済に改められた形跡がある。すなわち、借金した当初の返済計画はすべて既に行き詰まり、やむなく変更せざるをえなくなった状況を示すものと考えられる。

そのなかで境や弥左衛門を金主とする金二百両の借金は、無利二か年賦の返済であった(これとても見直された結果であろう)ものが、返済が始まる初年度の寛政七年からまったく返済できない状態になって、ついにこの年、境や側から幕府に訴えられていた。訴訟の末に宇津家は境やに二人扶持、その後も三人扶持を与えることで何とか和解にこぎ着けたもののようである。その後、寛政九年から改めて年に米二俵宛の返済計画を立てた様子が推定できる。しかも宇津家は寛政十年にそれまで愛宕下にあった屋敷から、西の久保の屋敷に転居している。屋敷替えが借金返済と無関係ではないと推定できる。この寛政七年から十年に至る前後の時期、宇津家は、知行所からの貢租収入がど

表6 寛政12申年 宇津教長代の借金並びに返済方入用書上

借り入れ先	当申年返済方入用	借用及び返済方明細
小田原宿	当申利息 金11両1分ト銀9匁	小田原宿助成金元利76両
達道	金1分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	切金4両2分
芹澤や半之助	金1分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	借用金高不詳
近江や十左衛門	金1分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	借用金高不詳
伊勢や伝之助	金2朱 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金45両、 無利10か年返済相定候処
渡邊新右衛門	金2朱 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金46両1分、 無利年々3両宛返済の処
尾張や徳兵衛	銀3匁7分5厘 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金20両 年々1両2分返済の処
京や清八	金1分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	当初借用金高不詳 無利息証書書替、76両 年々4両宛返済の処
綿や権兵衛	金2朱 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金62両 年々3両宛返済の処
栄寿寺	金1分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金100両余 年々5両返済の処
萬や勘兵衛	金2朱 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金48両 年々3両返済の処
綿や喜兵衛	金2朱 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金9両2分 去る寛政7卯年金1両2分ト 銀6匁返済
備前や七郎右衛門	金2分 寛政9巳年より5か年 返済方入用	借用金高不詳 年々6両返済の処
境や弥左衛門	米2俵 寛政9巳年より5か年 返済方入用	金200両、無利20か年賦返済 の処、初年より返済なし 去る寛政7卯年春公訴候 2人扶持支給、同秋3人扶持

註) 「寛政十二申年大学様御台所御入用月割中勘」『全集第十巻』31頁。

ん底に落ち込み、負債返済の目処も立たない。万策尽きた財政破綻の状態にあった。教長はこうした状態から逃れるため、ひたすら病気を「理由に」幕府への公用出仕を断り続けていたのである。

宇津家知行所の財政は一八世紀末にはすでに破綻しており、本家小田原藩の支援がなければ、抜本的な家政改革を早期に断行せざるをえない状況であった。旗本財政の破綻から金主を依頼しての家政改革・勝手賄い等の事例は少なくない。財政破綻を起因とする家政改革一般と、宇津家知行所仕法との違いは何か、実施された仕法の内容からの追究はもとよりであるが、小考では、先ず仕法受諾時の経緯のなかから考察を加えたい。

二 一宮金次郎の登用と仕法の請負契約

1 小田原藩による金次郎の登用

前章では、宇津家知行所の成立と当主の事績、一八世紀中期以降の戸口と財政収支の悪化から、改革仕法導入が避けられなくなった状況を検討してきた。五代目当主に養子として飢之助を迎えた時期の宇津家財政は、知行所三か村の衰退と年貢収納高の減少によって貧窮の極にあつた。借金返済の目処は立たず、すでに金融による解決の道も閉ざされ、小田原藩の助成なしに自立しては成り立たぬ状態であつた。

先に見た享和期から文化期の財政収支の勘定(表4)は、毎年、金數十両から百数十両の欠損を計上していたが、これは当時抱えていた負債とその利息返済分を含みぬ数値であり、知行所の収支勘定といつてもその実態を尽くしているものではない。現実の負債返済分や公用勤の経費を加えた毎年の不足金額は、はるかに大きなものになる筈である。現実に発生する欠損分を何で補填していたかといえ、親戚筋も旗本・御家人層はあまり頼りにならず、結局は小田原藩大久保家にすぎるより外なかつた。

御本家様より出格之以御仁恵、荒地起返、米麦雑穀取増、其潤沢を以用悪水、道橋普請、入百姓人別増、借財返済、窮民撫育、潰百姓取立、村柄旧復之仕法被仰出、多分之御入用を以数年御世話被進候得共、何分立直り兼、術計尽果、無余儀趣¹⁴⁾、

実際に小田原藩から助成しなければならぬ金額がどれほどであつ

たか詳らかではない¹⁵⁾。具体的助成金額は不明だが、小田原藩も近世中期以降、宝永の富士山噴火をはじめ享保期の酒匂川の大洪水、天明期の大地震など、藩を揺るがさんばかりの度重なる自然の大災害に見舞われていた。小田原藩も財政の困窮は他人ごとでなく、少しも余裕のある状態ではなかつた。繰返し試みられた財政再建策も実らず、自藩の財政再建のためにも冗費はできるだけ削減する必要があつた。宇津家知行所の助成に要する出費問題の早期解決は、大久保家にとつても差し迫つた課題となつてきていた。

小田原藩では、寛政八年(一七九六)、前藩主大久保忠顕が病氣のため隠居した後を承けて、大久保出羽守忠真が十一万三千石の封を継いだ。忠真はまもなく安芸守と改め、同十二年から奏者番、文化元年(一八一四)からは寺社奉行、同七年から大坂城代を勤めた。公儀役歴任のため小田原に帰城する機会が少なかつた忠真であるが、享和三年(一八一三)には旧弊の改革を促す直書を藩内に告知し、風儀取締・諸事儉約の触書を発布、文化二年(一八一五)、家中に三か年間の儉約を命ずるなど藩政刷新に積極的な姿勢を見せた。

忠真は、文化十二年(一八一五)には京都所司代に就任、役知として一万石を給せられた。役職にともなう収入増があつたが、他方、要職就任や幕命の海防強化策による出費の増大もあつた。このころの小田原藩は、しばしば幕府から公金を借り受け、領内から新たに御用金を徴収した。また、御用達商人が出資した資金を元手に住吉講・融通講などの利殖制度を立ち上げ、必死に財政再建に取り組もうとしてい

た。^⑬

文政元年（一八一八）、忠真はさらに幕府老中に昇進した。幕府出仕のため京都から帰城した機会に領内の酒匂川の河原に村役人らを集め六か条の心得を示し説諭に努め、あわせて孝子・節婦・奇特者の表彰を行った。このとき表彰を受けた領民一三人のうちの一人が栢山村金次郎で、後に宇津家知行所の復興に大きな足跡を残す二宮金次郎である。^⑭

一家離散の辛酸を舐め自家再興を果たした金次郎は、所持地を小作に出し小田原城下に出て若党奉公を始めた。奉公先は禄高千貳百石で小田原藩指折りの大身、家老服部十郎兵衛の屋敷であった。若党は江戸時代、武家屋敷に奉公する軽輩従者のなかでも最上位に位置づけられ、その下位に走り使いや雑役に従事する中間や小者などがいた。譜代奉公人もいたが、年季の出替わり奉公人も多かった。二五歳の金次郎が、はじめて奉公する服部家に単なる中間・小者ではなく若党として雇われたことは、そのこと自体すでにその能力が一定の評価を受けていたことを示している。誰が口入したか不明だが、若党に値することを口入れ世話人と雇用する服部家が認めていたのである。

服部家に奉公した金次郎は、この評価に値する仕事を始めた。他の奉公人を説得して台所仕事を改善し、経費節約に成果を上げたのである。^⑮節約した経費を資金運用する「五常講」を組織し、奉公人の生活改善に役立てた。主家の経営改善と奉公人の生活改善を一つに統合し、これを仁義礼智信の徳目の実践であると教えて見せたのである。^⑯服部

家を一度退いた金次郎は、文化十四年（一八一七）に隣村の娘と結婚し、しばらくは自家経営に専念しようとしたが、多額の負債を抱え行き詰まっていた服部家は、再度金次郎を呼び戻し、借財整理と家計再建の世話を依頼した。奉公中に見せた金次郎の手腕を高く評価し期待したのである。金次郎は文政元年（一八一八）、服部家に戻り家計調査をしたうえで、服部家と家中に厳しい節約を求める財政再建案を作りまとめた。金次郎が藩主大久保忠真から酒匂川河原で奇特人として表彰されたのは、そのころである。服部家奉公で発揮した手腕が、小田原藩内で評判となり注目を集めていた。

文政二年（一八一九）、小田原藩は領民に生活改善のための提案があれば提出するよう命じた。これに応え金次郎は、当時小田原藩領内で幾種類もの枡が不統一なまま使われていたの改善し、領内で同一規格の枡を使用するよう進言した。提案はすぐに採用され、新枡の具体的な規格の提示を求められた。金次郎は三杯量ると四斗一升（一俵分）になる新枡を考案して献上したところ藩はすぐに採用し、その秋から実用化された。

一方、服部家の家計再建は金次郎の提案が一定の効果をあげながらも、服部家当主が江戸詰家老に転任したことから臨時の出費もあり、なかなか完全な成果をあげきれないでいた。そこで金次郎は、小田原藩勝手方家老の吉野図書を訪ね、高利の負債を抱え苦しむ藩士を救済するため、藩主催の低利融資制度をつくることを進言した。藩はこれに忠真「御手元金」から一五両を出資、さらに民間からも出資者

を募り、数千両の資金を集め、これを元手とし一年賦、あるいは五年賦返済の契約で貸し付けた。金利は八朱（八％）と低利であったから、融資を受けた者はそれで高利の負債を早期に整理することができた。金次郎はこの融資制度を「八朱金」と名付け、服部家も文政三年末、この資金を一年賦で金四五両を借りて高利の負債を整理したという。

文政元年の表彰以来、金次郎は服部家で重用されたばかりでなく、小田原藩そのものからも経営手腕を高く評価されており、一部の重臣との交渉を通じて藩の施策に提言することもできるようになっていた。出替わり奉公の若党の立場としては異例の重用といわねばならない。こうした人物評価がその後の仕法依頼の前提となっている。

文政四年七月、小田原藩は大久保家の分家である宇津家知行所の立て直しに、金次郎を登用することを決定した。これまで続けていた同藩の分家支援が功を奏さぬことで、藩の歳費削減上からも宇津家知行所対策を根本から見直す必要に迫られたのである。藩主大久保忠真ははじめ金次郎を小田原藩の財政再建策そのものに参画させようとしていたとの説がある。「八朱金」設立などの経緯からみれば、藩勝手方の内にそうした意向を持つ者がいても不思議ではない。しかし、そうした動きを強く警戒し反対する勢力もあった。藩内の権力闘争、指導権争いも推測される。忠真はやむなく金次郎を宇津家知行所の再建に登用することにした。藩内の紛争を避けるねらいがあったと考えられる。

命をつけた金次郎は、早速、宇津家知行所の実地調査を行うことになり、小田原藩担当掛かりから路用金一両の支給を受け、八月一日、はじめて現地調査のため小田原を発ち桜町に向かった。以来、文政六年三月の桜町移住まで、金次郎が栢山村（小田原）と桜町、あるいは江戸と桜町を往来した回数は、表7に見るとおり、実に一回以上ののぼる。栢山と下野の桜町間の往来に掛かる日数は、桜町滞在や途中旅館に宿泊する日数も含め短いときで一日間、長いときで一か月半に及ぶ。栢山 江戸間は一日行程、江戸 桜町間は二日ないし三日の行程であった。江戸での宿泊を入れれば、三泊四日あるいは四泊五日が栢山村 桜町間の一般的な行程であった。

表7 宇津知行所実地調査往來日程

年次	栢山～桜町間往來日程			
文政4年	栢山8／1 発	→	江戸経由	→ 桜町8／？ 着
	栢山8／21 カ着	→		→ 桜町8／？ 発
	栢山10／9 発	→	江戸11／？ 着	→ 桜町10／23 着
			江戸11／5 発	→ 桜町11／2 発
				→ 桜町11／8 着
	栢山11／？ 着	→	江戸11／18 着	→ 桜町11／15 発
文政5年			江戸11／20 発	→
	栢山12／19 発	→		→ 桜町12／23 着
	栢山12／晦着	→		→ 桜町12／25 発
	栢山1／26 発	→	江戸1／？ 着	
	栢山閏1／？ 着	→	江戸閏1／6 発	
	栢山2／17 発	→	江戸2／？ 着	
	栢山2／27 着	→	江戸2／？ 発	
	栢山4／9 発	→	江戸4／？ 着	
			江戸4／17 発	→ 桜町4／20 着
	栢山5／22 着	→		→ 桜町5／20 発
	栢山8／29 発	→	江戸8／晦着	
			江戸9／4 発	→ 桜町9／6 着
			幸手9／13 着	→ 桜町9／11 発
			幸手9／14 発	→ 桜町9／16 着
	栢山9／晦着	→		→ 桜町9／26 発
	栢山11／3 発	→		→ 桜町11／7 着
文政6年	栢山11／25 着	→		→ 桜町11／19 発
	栢山11／晦発	→	戸塚宿12／晦	→ 桜町12／4 着
				→ 桜町12／26 発
	栢山1／1 着	→	戸塚宿1／1 発	
	栢山3／13 発	→	江戸3／15 着	→ 桜町3／28 着
			江戸3／26 発	→

註）「野州芳賀郡桜町御用雜用控帳」『全集第十四巻』1001 頁
「文政六未年日記帳 桜町陣屋」『全集第三巻』13 頁

金次郎は小田原藩から要請を受けても直ぐに受諾することなく、い
くども固辞し続けたが、再三の要請に抗しきれず、現地の実地踏査を
したうえでとの条件で引受け、まずは現地調査に赴いたと伝えられる。²⁰⁾

八月一日に小田原を發つた初回の現地視察に続く、二回目の現地踏
査は十月九日に小田原を發ち、十月二十三日に桜町に到着した。三泊
四日ないしは四泊五日の小田原 桜町間の所要日数からすれば、一五
日前後を要した行程は江戸での長期滞在を推定させる。桜町到着が十
月二十三日であつたことから、江戸 桜町間の所要日数の二日分を遡
ると江戸を發つた日は十月二十一日だつたと推定できる。

ところで、この江戸出立日と推定される日の前日、十月二十日に作
成され、知行所三か村役人と百姓惣代宛に通達された文書が三通（
一）残されている。²¹⁾

巳（文政四年）十月二十日 宇津釧之助仰渡書（直書）

家老代田五左衛門奉行

文政四巳年十月二十日 家老代田五左衛門申達 小田原二

宮金次郎奉行

文政四巳年十月二十日 小田原藩郡奉行三幣又左衛門仰渡書

小田原二宮金次郎奉行

このうち の文書は、宇津家当主釧之助が、知行所村役人と百姓惣
代に当てた直書で、詳細は家老代田五左衛門を奉行人として伝達する
形式をとり、実際は江戸から桜町に下向した金次郎らに託し知行所に
もたらされたものと推定される。内容は先代から続く知行所の衰微、

収入不足のため幕府公用を果たすこともできない釧之助の様子を述べ、
ただ本家の助力だけで凌いできたが、本家の支援努力ももはや限界に
達したことを述べた上で、

本家よりも猶亦、今般、出格之世話有之、領分建直之趣法被申含
陣屋詰等相越候間、其方共我等志願之趣、尤之儀と承受候はば、
三ヶ村役人共を始め、小前未々迄、一同厚申談、百姓之本業を守相
励、（中略）一同安穩に暮し、收納古に復し候様に致すべく候。²²⁾

との文言が続き、今回、本家大久保家から新たに復興仕法が發せられ
計画を推進する使者が桜町に派遣されることが、宇津家当主の立
場で明言され、家老の代田五左衛門がそれを領民に伝達するとしてい
る。文書中に見える小田原藩から派遣される「陣屋詰ら」こそ、文書
を江戸から持参した金次郎らであつた。²³⁾

次の の文書は、宇津家当主の意向を承けた宇津家家老の代田五左
衛門が、知行所の村役人に申渡したものを、小田原から派遣された二
宮金次郎らが知行所に持参し領民に伝達したものである。内容は、宇
津家の江戸屋敷が類焼してすでに一年あまりを経過したが、未だに
普請や幕府に出仕するための経費もないこと。来春までに普請と出仕
の経費が八 両あまりも必要なこと。当主が出仕するようになれば、
さらに年間二 両くらいは出費が増えるが、これまでも年々七、八
両の金が不足していたのだが、さらに足らなくなる。本家大久
保家から新しい趣法が出され陣屋詰として勝俣小兵衛と二宮金次郎と
いう者が派遣されること。この二人の指示（下知）を受け努力するよ

うにと述べている。ここには小田原藩から派遣される二名の「陣屋詰」の名前が明記されている。

三つ目の文書は、小田原藩の江戸詰の郡奉行三幣又左衛門の申達を、小田原から派遣された二宮金次郎が領民に伝達しているものである。内容は、本家大久保家は一昨年（文政二年）以来、宇津知行所の取り直しに努めてきたが、とかく行き届かなかった。昨年、現地に赴き見分したが、施設はともかく領民の現状のままでは復興は覚束ない。藩の重役と宇津家当主に相談した結果、旧弊を改め農家の本業を正すことにしたので詳細は勝俣小兵衛と二宮金次郎によく相談して行うように、としている。

三通の文書は、いずれもすでに小田原藩による新しい仕法（趣法）の実施と、その推進役として派遣される二名のことを明記している。しかも三通のうちの二通までが、その奉行人としてすでに「小田原二宮金次郎」のことを明記する文書として作成され、発給されている事実注目すべきである。

二度目の桜町往きに際し、金次郎が江戸に長滞在し、文書の発給された翌日に文書を携えて江戸を発ったということは、江戸での長滞在がこれらの文書を作成するため、すなわち仕法の推進を確認し合うため、小田原藩（江戸詰郡奉行三幣又左衛門）と宇津家（家老）と金次郎との間で交わされた交渉、協議に要する時間であったと推定されるのである。とすれば、金次郎の二度目の桜町行きは、通説のように単なる実地踏査のためではなく、すでに仕法を実質受諾し、その推進の

ための第一歩を踏み出すためのものであったと考えざるをえないのである。文政四年八月の時点で金次郎は、宇津家知行所建て直しの仕事（仕法）を受諾する決意を半ば固めていたと推定せざるをえない。ただ、受諾の条件をどうするかまでは決まらず、その後の交渉を要した次節で仕法の請負受諾が最終的にどのように決着したか検討したい。

2 仕法計画の立案と伺い書の提出

文政四年（一八二一）八月一日、金次郎は小田原藩からの指示を受け、実地踏査のため初めて宇津家知行所を訪ねた。金次郎は文政四年だけでも三度桜町陣屋を訪ねている。このうち二度目、一月二三日に桜町に赴いた時は、宇津家の当主宇津飢之助と家老の代田五左衛門、小田原藩郡奉行三幣又左衛門から領民に向け出された仕法実施通告の文書（前述の三通）を携えての訪問であり、もはや単なる実地踏査ではなかった。この間、つねに江戸で宇津家や小田原藩と交渉を重ね、仕法実施の方法を慎重に探っていたものと考えられる。

文政五年正月、小田原から江戸に向かった金次郎は、前年三度の桜町訪問の結果から作成した報告書とともに、仕法実施に関する最初の伺い書を提出していた。文政五年正月付で二宮金次郎と署名された文書が、下書の可能性のあるものも含め数通残されている。そのうちの一つが「拾ヶ年御物成米永共御趣法御土台金平均帳」で、文化九年から文政四年に至る一か年間の年貢収納高を取り調べ、最後にその平均高を算出し、仕法の基礎資料としたものである^②。この内容を概観す

もう一つは「御分知
宇津飢之助様御知行所
三ヶ村荒地起返難村旧
復之仕法取行方奉伺候
書付」で、要するに宇
津知行所建て直し計画
を提案した最初の伺い
書である。この文書の
冒頭には「荒地起返難
村旧復之仕法平均御土
台取調之事」として前
の文書の取り調べ結果
が引用され、続いて調
査結果にもとづき、次
のような仕法の提案が
行われている。

難村旧復之趣法被
仰出、存分可執行
旨御任被仰付罷越
候得共、何一つ治
定可仕目当無御座

		田 方				畑 方					
		束 沼 村	横 田 村	物 井 村	3 か 村 合		束 沼 村	横 田 村	物 井 村	3 か 村 合	
					口 米 合	俵 納				口 米 合	諸 引 納 水
文 化	9	石	石	石	石	俵	貫 文	貫 文	貫 文	貫 文	貫 文
	10	132.861	75.464	193.29	401.615	1,112.155	55.554	22.350	110.841	194.643	163.790.7
	11	121.923	74.458	176.129	372.510	1,031.296	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
	12	110.988	47.321	126.007	284.316	787.191	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
	13	110.827	48.632	143.385	302.844	838.310	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
文 政	14	93.038	54.595	162.859	310.856	861.011	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
	1	107.911	56.192	157.716	321.819	891.145	55.554	22.349	110.849	194.642	127.918.9
	2	112.808	63.270	166.830	342.908	949.300	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
	3	124.197	69.154	184.779	378.130	1,047.136	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
	4	128.817	76.756	191.944	397.517	1,101.025	52.804	19.599	106.841	184.845	118.121.9
	4	128.657	72.570	161.850	363.077	1,005.249	55.554	22.349	110.841	194.642	127.918.9
平 均						962.255					130.526.3

注 ① ② ③ ④

宇津家知行所仕法について、金次郎がはじめて立案提出したこの計畫書に、後に確立される「報徳仕法」の原理的な要素が、すでに明確に現れている。まず第一に、過去一か年の上納高の平均を計算し、これをもつて向こう一か年の定免高とすること。第二に、その後も起き返しを行い田畑の復旧がなれば、その復旧の状況に應じて相当の年貢を課すること。第三に、復旧がなくても、定免高を超える余剰分は領主に上納せず、金次郎に下げ渡し仕法入用金として活用するに任せること、以上の三つである。伺い書は、この三つの原則が認められれば、あとは特に領主側から出資を受けずとも仕法を独自に展開し、どんなに荒れた村でも復旧が可能だとしている。荒廃した知行所の復興がなるかならぬか、宇津家の「国益」を増進する改革ができるかどうかは、この三原則が承認されるかどうかにかかっているといっているのである。

ただし、右の第一原則にある「定免」は、通常の近世村に見られる定免とはまったく意味合いが違ふ。表8を見てもらひかな通り、一か年の平均高は個々の村ごとに計算されるのではなく、三か村を合計した知行所全体の上納額である「俵納」「諸引納永」から計算されたものであることに注目したい。通常ならば定免は村ごとに定められるが、ここでは知行所全体の上納高の平均が算定されている。したがって現実に個々の村が上納する額は、復興の進展具合によつて変化すると目され、もし復旧の実が上がれば、上納額も当然増大し、定免高との間に格差が生じ、その余剰分が金次郎の手に「仕法入用金」として下げ渡され、復旧開発用の資金が増える仕組みになっている。まさに「土中に埋もれ居り候無尽の米金をもつて」開発を進めるといふことが文字通り実現することになるのである。

金次郎はこの伺い書の前の文言に続けて、「荒地起返難村旧復之仕法入用金算出方之事」という文章を付けており、そこで「反永定免之外、多少に不限冥加米算出次第、荒地起返、難村旧復之仕法入用金として、年々御渡可被下候事」と述べ、定免を超える収納が、仕法資金を形成する源である断言している。

この伺い書から金次郎が構想する復興計画と、その各段階における上納高を表にすると、次の表9になる。

まず、近世前期、元禄一二年から享保年間にかけて、まだ高額の年貢賦課が行われていた時代の上納額（上限額）がA欄の数値である。次に仕法伺い書が作成された文政四年から過去一か年間の平均上納

表9 文政5年正月 仕法伺い書関連上納高

	摘 要	田方本免	畑方小物成
A	寛文検地後 元禄12年 ～享保度	米 3,116 俵 3462	金 202 両 1 分 2 朱 永 70 文
B	文化9～文政4 10ヶ年平均 文政5～定免	米 962 俵 2558	金 130 両 2 分 永 26 文 3 分 8 厘
A - B	文政5年 荒地減収高	米 2,154 俵 0904	金 71 両 永 918 文 6 分 2 厘
C (A + B) × 1/2	此の平均 11ヶ年目～ 定免額	米 2,039 俵 301	金 166 両 1 分 2 朱 永 110 文 6 分 8 厘
D (C - B)	文政4年～ 定免額への 復旧増高	米 1,077 俵 0452	金 35 両 永 959 文 3 分 1 厘

註 典拠史料は「文政五年御分知宇津銀之助様御知行所三ヶ村荒地起返難村旧復之仕法取行方奉伺候書付」『全集第十巻』803頁。

高がB欄（下限額）で、金次郎はこの上納高で向こう一か年の「定免高」としようとしている。次にA - B欄は、A（上限）とB（下限）の差額で、知行所の荒廃による落ち込み相当額を示している。C欄はAとBの平均、金次郎はこれを「天然自然に取り続き罷り在り候平均度」と呼び、仕法が計画通り推移すれば、仕法実施一か年目からは上納高の水準は、このC欄の数値に達し、これを新たな「定免高」とすることができるとする。このC欄の上納高から、文政五年時点の上納高（B欄）を差し引いたD欄は、文政五年の年上納額に対する一一年目以降の増益高となり、これも金次郎の手に残り、新たに開発資金に加えられる額となる。D欄の数値によれば、一年後には田方上納高は倍増し米二一五四俵

を超え、畑方も金三五兩の増収を得ると見込んでいた。

金次郎がこのような仕法計画の伺い書を提出したということは、この条件さえ認められれば「引き受けてもいい」、「引き受ける意思がある」ということを表明したことにほかならない。

この伺い書はたいへん重要な文書であるが、一か所だけ疑わしい部分がある。奥付の部分に二宮金次郎の署名があるのだが、これに「御普請役格」の肩書きが付されていることである。この肩書きは晩年に金次郎が幕臣に取り立てられた頃の身分（役職）であり、文政五年の肩書きとしてはありえないものである。史料が『全集』に収載される際、その前後に嘉永年間の後筆文書が多いことから、それらの文書と文政期のこの文書が一括混同され、『全集』に収載される過程で、文政期の文書に誤って後筆が加えられたか、あるいは、この文書そのものが、もともと嘉永期に写しとして作成されたものであるため、当時の金次郎の肩書きが付けられたか、いずれにせよ、原本閲覧によらぬかぎり、『全集』に収録されたものを見るだけでは、真偽のほども確認できない。『全集』稿本を収蔵する保存施設で原本閲覧の許されていないことを遺憾とする所以である。

金次郎の江戸滞在期間に照らし、この仕法計画伺い書が提出された時期は、文政五年正月末の頃と思われる。この伺い書の内容を承認する意思が領主側から示されたのは、それから約二か月を経た（文政五年は閏正月がある）二月二十四日頃と推定される。これに関する小田原藩内の承認手続きであるうと推定される文書が『全集第十巻』の解題

で紹介されている。

午二月二十四日

一、拾ヶ年相立ち候上（迄カ）は、御物成米千五俵余、畑方金百貳拾七兩余並夫中間金拾七兩余、其外荏大豆石代金之外、金次郎に為御任年限中は、上納不仕、人別、軒別増等之舍に仕候趣に相見申候、

伺いの通り

一、御知行所入用為御任、米二百俵、金五拾兩にて金次郎へ為御引受、年々御勘定合等是不申上候、尤、是は御台所より御足米金と心得居候、併、小兵衛も引越居候事故、同人よりなり共、薄々も荒増之処、申上度心組に御座候、

其の通り致すべく候

一、金次郎彼地引越候上は、拾ヶ年相立候迄は、心組之処一々申上等は不仕候、且年限内にて小田原表へ引取等被仰付候ては迷惑仕候間、是等之処、耽と御取極被成下度候

十ヶ年内にて引取等は被仰付間敷候

右之趣、去年二月二十四日五郎右衛門殿へ相伺候候、御下ヶ札にて相済候

この文書は、三つの項目について下げ札による承認決済がなされたことを示しているが、文書そのものは写しである。重要な事項について承認を得る伺い書が、下げ札による決済手続きを踏むことは、江戸時代の行政手続きとしては一般的なことであり、こうしたことは金

次郎も承知はしていたであろうが、その手続きそのものに当時の金次郎が直接係わるということは考えにくい。そこで、この文書は金次郎から前の伺い書で条件提示を受けた小田原藩の担当役人が、その上司に伺いを立て、決済（伺い済み）を受けた状況を伝えるものと考えるべきであろう。しかし、たとえそうであっても、前の伺い書で提示された仕法受け入れ条件に関する金次郎の強い意志の反映を行間に取り出すことができる。

伺いに対し決済を下した最後の行にある五郎右衛門なる人物は、この文書からは誰であるか確定できないが、当時、江戸で代官を指揮しこの問題を担当していた小田原藩勝手方の責任者は御用人兼郡奉行の三幣又左衛門であり、江戸の担当代官中にも五郎右衛門なる人物はいない。そこで、江戸の勝手方が作成した伺い書に下げ札を付して伺い済みを出す可能性のある五郎右衛門なる人物は、少なくとも三幣又左衛門と同格か、あるいはそれより上のクラスで、小田原の有力者であると推定される。当時、小田原藩勝手方責任者の中に小田原詰めの用人で石原五郎左衛門なる人物がいたことが知られている（「御家中先祖並親類書」）。もし、史料中の五郎右衛門が五郎左衛門の誤読であったとすれば、江戸で担当代官が作成した伺い書が、江戸勝手方責任者三幣又左衛門の了解を経て小田原表に稟議され、小田原の勝手方責任者石原五郎左衛門の決済を受けたとみること^③もできる。

文書に見る伺いの第一は、文政五年の上納高をもって定免額と定め、金次郎に仕法委任した期間中は、それ以上の上納を求めず、戸口の立

ち直りを期すこと。第二は、仕法実施期間中必要とする経費は、一定額を藩からの出費と考えて金次郎に与えて引受けさせ、年々の報告は特に求めない。金次郎と一緒に桜町に赴任している勝俣小兵衛から内々に概の報告をさせるに止める。第三は、金次郎に仕法を委任し桜町に赴任させる以上、一か年間は途中で仕法を取り止めたり、金次郎を小田原に引き戻すようなことはしないこと、以上が明確に確認されようとしている。

このうち第一点では、正月に金次郎が伺い書を提出した際の定免上納高の基準は、過去一か年の平均額で田方米九六二俵余、畑方金一三両余と中間金・荏・大豆石代金となっていたが、二月の伺い済みで、「昨年通り」が定免の基準とされ、文政四年の上納高である田方米一五俵余、畑方金一二七両余が定免の基準として用いられることが確定した。田方の上納基準は若干引き上げられ、畑方はわずかではあるが引き下げられ、その外についてはおよそ金次郎提案の線度伺いがなされ、その通り認められていた。

この時点で、金次郎が仕法を引受けるための基本条件は、小田原藩の勝手方責任者の了解を取り付けることができた。金次郎はこれを受けて早速、江戸を発ち、二月二十七日に栢山に戻った。

下げ札による聞き済みとして小田原藩が金次郎の提示条件を承認したとはいえ、まもなくさらに詳細な詰めが必要になった。金次郎はふたたび四月九日に栢山を発ち江戸へ向かった。そこでの交渉を通じ小田原藩から仕法条件に関する第二の確認を取り付けている。このときの

模様を伝える史料も前の文書に続き、『全集第十巻』の解題に紹介されている。

午四月十二日伺い済み

一、御物成御勘定之儀は、昨年之通り米永其外上納辻にて十ヶ年之間、年々御勘定可仕候、尤、荏大豆御払石代之儀は、年々増減御座候、

一、格別凶年之節は、上納辻相減候儀も可有御座候、

右之趣、午四月十二日御用人へ相伺候処、伺之通り御下知御座候、右之趣、御役方より金次郎へ書付相渡候様可仕哉、此段相伺申候、

三月

兩人

四月一二日に新たに伺い済みとなった事項が二つある。一つは向こう一か年定免の基準を「昨年之通り」する前の決定に加え、荏・大豆・米の代錢納基準を、当年相場で変動させることである。二つは、定免上納を原則としつつも大凶作時には別の減免措置がありうることの確認である。前の伺い済ましに加え、さらに細目の確認をすることが、どちら側の要請で行われたかは定かではない。しかし、内容を見れば、いずれの立場から見ても、やはり細かな詰めを要する事柄である。特に、二つめの凶作時の破免に関する確約は、仕法の正否に関わる重要な事項であった。二月の伺い済み後、さらに交渉、検討が行われた結果、再度の伺い済みが必要になったものと見られる。この後、金次郎はすぐに桜町に向かい、五月二日には栢山に戻った。その後、八月、九月、十一月、十二月と四度も小田原と桜町の間を往復して

いる。九月以降は「桜町御陣屋 日記」²⁷にも金次郎の足跡が残り、一緒に桜町に派遣されることになった勝俣小兵衛らとともに、さっそく知行所内の村々を巡り、仕法の一部を実施に移していることが確認できる。小田原藩の命を受け、宇津家の了解のもとに、金次郎が実施する仕法は、文政五年四月には開始されていたと見て良いであろう。

しかし、これまでの伺い済みの手続きは、金次郎と小田原藩との交渉経過をたどりつつも、あくまで小田原藩行政内部の手続きに止まるものであって、それ以上のもではなかった。対民間社会との関係、特に知行所民との関係を考えれば、仕法を請け負う金次郎の立場からは、より確実な保証を領主側に求めなければならなかった。小田原藩はもとより宇津家も、これまでの確認事項を間違いなく承認した上で仕法を金次郎に委ねていることを、領民に対して明確に示す必要があったのである。金次郎はそのことにこだわり続けた筈である。

前掲、四月の伺い済みの末尾にある奥書を見ると、この伺い済みの趣を書付にして金次郎に渡してもよいかどうかという伺いが、「兩人」（小田原藩江戸詰代官と推定される）の名の下に三月付でなされていることが分かる。ここでいう「三月」は前後の事情から見て文政六年の三月と考えざるをえない。とすれば、いままで述べてきた仕法請負条件は、文政五年の四月に藩行政内部で伺い済みになった後も、確認ある文書で金次郎に渡されていた訳ではなく、一般領民に告知されていた訳でもない、ということになる。これでは仕法を引き受けようとする金次郎にはおおいに不安が残った筈である。当然ながら金次郎は

提示した条件を、小田原藩と宇津家の双方が明瞭に承認したことを示す文書の発行を求めたのである。それが四月から翌年の三月、金次郎一家が栢山を立ち退き、桜町へ転居する直前まで実現していなかったことは、とりもおさず、この文書の発行に至るまでに困難な経緯が存在したことを裏書するものといわざるをえない。

金次郎一家は文政六年三月一日に栢山村を発ち、一日から二五日まで江戸に滞在、江戸では麻布六本木の小田原藩中屋敷に逗留、同じく小田原藩から派遣される勝侯周左衛門（小兵衛改め）と同道、二六日に江戸を発ち二八日に桜町陣屋に到着した。この間、江戸逗留中に小田原藩から通達された文書がある。

飢之助様御知行所野州村々立直之儀に付、御趣意有之、拾ヶ年之間、彼地引越被仰付、此度引移候付ては左之通

一、去年より来ル卯年迄、拾ヶ年之間、御知行所御物成、米千五俵余、畑方金百貳拾七兩三分余、荏、大豆石代金並夫中間金拾七兩余之外は、為御任年限中、不及上納候、

一、御知行所入用、為御任米貳百俵、金五拾兩にて引受、年々致勘定不及候、且又、右米金は、御台所より御足被成候米金と相心得可申候、

一、彼地へ引越、拾ヶ年之間は心組之次第一々不及申聞候、且年限中、小田原へ引越申付間敷候、

一、御物成御勘定之儀、拾ヶ年之内は、昨午年上納辻を以、米永其外共可被致勘定致候、尤、荏・大豆石代金之儀は、時之相

場次第増減可有之候、

一、格別凶年之年柄は、上納辻制外に候、

一、年々割付之儀は、昨午年之通正業を以相渡、尤、下ヶ札に増減可有之候、

右之通り、相心得拾ヶ年之間、出精可相勤候、以上

文政六癸未年三月

磯崎丹次郎 茂盈（花押）

高田 才次 武正（花押）

二宮金次郎殿

前書之通、拾ヶ年之間、為任置者也

飢之助 教成（花押）

文書の中身は、ほぼこれまでに伺い済みされてきたことからの確認にすぎないが、「金次郎殿」と敬称を用いて、小田原藩の江戸詰代官である磯崎・高田の両人が花押を付して連署し、あらためて宇津家知行所における年貢勘定の取扱について、向こう一 かにわたり金次郎の提案を承認し、仕法を委任することを誓約した内容となっている。しかもその奥に宇津飢之助が自ら奥書署名し花押を付している。仕法を請け負う金次郎の立場に最大限に配慮し、権限を委譲するものとなった。

金次郎はすでに前年文政五年のかかなり早い段階から、身辺整理を心懸けていたものと推定される。栢山村と桜町を往復する多忙な暮らしのなかで、栢山村に戻るたびに所持する田畑や債権債務の処理などについて、関係書類に周到に目を通しながら、時間をかけて準備した形

跡が、「家株田畑高反別取調帳」^②などの関係書類から読み取れる。そこには公私を問わず、些細なことも疎かにせず、けじめをつける金次郎の身の処し方がよく表れている。桜町転居が迫った文政六年正月二日から筆を起し、いよいよ桜町に向けて江戸を発つ三月二十六日までの「歳中金銀出入帳」が残されており、その表紙には副題として「小田原より道中入用 二宮金治郎」と添書されている。年始の支出の記述の中に「是は野州事につき色々御世話相成り候御礼に遣わす」などとある。ついで二月二十八日の条には、「金五拾両 御勘定より野州引越しにつき引越金ならびに家作金共下し置かれ候」とある。小田原藩からの赴任手当の支給である。

その後、関係の深かった服部家との間の金銭の処理や、取引のあった商人への細々とした支払いなどが続き、出発直前の一二日に、「銭貳貫八拾八文 馬銀被下 是は野州出立に付御掛りより」と藩から旅費の一部が支給されている。同じ一二日の条に、「家財払方」として諸道具代金四両三分、銭一貫五八四文の入金がある。出発を前に金次郎が、自家の家財道具一切を人に依頼して売却した代金の請取である。家財道具の売却については別に「家財諸道具売り払い代金控え帳」^③があり、その詳細が分かる。何一つ無駄にしない金次郎の心組みというべきであろうか。この入金を加え、出発の前夜の金次郎の手元には、金五二兩二分と銭六三六文が残った。小田原から江戸、江戸から桜町への旅の経費は、金八両三分ほど掛かったと記されている。

私財をすべて処分しての移住ということは、士分の者の任地赴任で

はないことを示している。金次郎の桜町赴任は、百姓身分のまま代官下役の手付に近い仕事（仕法）の委任を受けての居住地変更という性格を持つことにも注意したい。

まとめ

前章まで二宮金次郎が宇津家知行所の仕法を小田原藩から依頼され交渉の末に仕法を請負受諾する経緯を見てきた。この経過から仕法請負の実態として確認された点は、次の通りである。

- (1) 小田原藩からの仕法請負依頼に対し、金次郎は明確な条件を提示し、その条件を保証する公文書を領民に公開するかたちで小田原藩勝手方と宇津家当主の双方から取得していること。
- (2) 領主側との間で確認された条件は、知行所人別・軒別・上納高の回復を図るため、

十か年の仕法期間中、格別の凶作年を除き、文政四年の上納高をもつて年貢上納することを請負い、これを上回る収納分は、仕法の入用経費として金次郎の運用に任せること。

とは別に、知行所入用として、仕法期間中毎年、米二俵、金五両を小田原藩台所から金次郎に支給し、その運用を金次郎に任せること。

仕法期間中、金次郎は居住地を現地に移し、意に反し現地から小田原に引き戻されることはないこと。

- (3) (2)で確認された条件の中には、金次郎自身の雇傭条件ない

しは身分に関する条項は、一切含まれておらず、そのことは、従来通り小田原藩領の百姓のままの赴任であることを示している。

以上三点の事実確認の上に立つて、二宮金次郎による宇津家知行所における仕法請負の持つ意味をさらに検討したい。

右に確認した事柄のうち、(1)の事項からは、仕法の依頼と請負の関係が、領主と領民(小田原藩領民金次郎)の間柄であるにも拘わらず、きわめて契約性の濃い関係として処理され、覚え書きが作成され取り交わされていたことが分かる。一方は、封建領主、他方は百姓身分であるが、両者間の契約は、領主の行政組織の文書手続きを経て確認成立した上で、単に組織内で承認されただけでなく広く領民に告知されている。そのことで契約の公共性と保証能力が高められ、仕法を請け負う金次郎の立場が強化されていることが注目される。

これは先納金を求める領主が、金主から資金融通を受ける際、知行所村の返済条件を記して作成する借金契約の証文に裏書き押印するのに近似している。知行所財政の行き詰まりから、金主に勝手賄いを依頼するため、知行所村と金主に年貢米の引渡契約を結ばせ、これに裏書き保障を与える文書手続きの慣習などを背景に持つものと考えられる。仕法請負の交渉過程において、右のような条件提示とその確約保証を強く求めた金次郎の交渉力に注目すべきであるが、その背景に勝手賄いを引き受ける金主の立場の社会的強化があることが想定できる。

(3)の事項は、領主から仕法依頼を受けた金次郎の身分の問題で

ある。請負契約によっても金次郎の身分が変更された様子がないということは、彼があくまで小田原藩の百姓であったということにほかならない。桜町に赴任した金次郎の身分は、名主格で二人扶持であったといわれている。百姓身分として小田原藩の勝手方代官の管轄下であった桜町陣屋に勤務をするということは、事実上、金次郎の立場は代官配下の手代に近いものであったと見なされるが、それが武家奉公人としての雇用というよりも、右の勝手賄いに見られる金主の立場に近い自立性を有していることに注意したい。請負契約のなかにそうした具体的事項は盛り込まれていないが、請負契約の結果、それに近い待遇を持つて扱われたと考えてよいであろう。とはいえ、金次郎は後に士分の扱いを受けるようになる。それは文政九年以降のことである。その後、金次郎と小田原藩との関係はとく難しくなり、かえってトラブルを醸し出す。士分に取り立てられたことは、金次郎にとって仕法契約の問題としては、逆に小田原藩との間で無用な制約的關係を生じさせることになる。しかし、請負契約の初期段階ではまだそうした制約は発生していない。

(2)に示される請負契約の条件は、知行所人別・軒別・上納高の回復を図ることをねらいとして作成されており、特に上納高の回復水準については、およそ二千俵とする具体的目標を金次郎側が別の文書で提示した上で契約された。請負契約の最大の眼目はこの目標達成に置かれており、他の事項はこの目標達成に付随する事柄と言っても過言でない。だが、この目標達成のため、実際の仕法は地方・勧農の全

般にわたる総合的施策として推進せざるをえない。しかし、請負契約としては、公事方の事項まで含む民政全般を委任する契約が結ばれていた訳ではない。

勝手賄いの用人（金主）ということになれば、職掌は年貢勘定の取扱いに限られる。代官配下の出張陣屋で手代が「手限り」で執行できる施策は、勤農と年貢取り立てを中心とする地方支配事項である。知行所村々の本格的な復興を目指す金次郎の仕法であるが、請け負った仕法が、どのような範囲の事業委任を受けているのか、厳密に確認される必要がある。

金次郎が宇津家知行所で、文政五年までに委任され、請負契約した仕法の内容とは、以上確認したものであった。ひとたび、こうした限定を試みた上で、この請負契約の内容と契約の経緯をみれば、仕法施策の執行上、原理的には、地方支配の枠内で、きわめて大きな自立性と宰領権を認められた請負契約になっていたことを認めざるをえない。宇津家知行所仕法をはじめとする二宮金次郎の「報徳仕法」が領主機構の枠内において展開しながら、つねに一定の自律性と独自性を確保しえた所以の一つは、以上述べてきた請負契約のありかたに規程されたものと考えられる。

註

(1) 敗戦後の報徳仕法研究の流れについては、大藤修氏が「戦後歴史学における尊徳研究の動向」『近世の村と生活文化 村落から生まれた知恵と

報徳仕法」(吉川弘文館、二 一・二、第一章所収)で要を得た解説をしている。研究の視点や方法上の問題点についても的確な整理がなされており、共感するところが多い。

(2) 上杉允彦「報徳思想の成立」『栃木県史研究』(14号、一九七七)、大塚英一「近世後期北関東における小農再建と報徳金融」『日本史研究』(263号、一九八四)、舟橋明宏「村再建にみる『村人』の知恵」(『新しい近世史』第四巻、新人物往来社、一九九六)、早田旅人「初期報徳仕法の展開」『民衆研究』(53 60、一九九七)、紺野浩幸「旗本宇津家の財政と桜町仕法」『千葉史学』(37、二〇〇〇)。上杉氏は報徳仕法の限界を指摘する立場から「報徳思想」の成立過程を論じ、大塚氏は百姓経営相続の観点から仕法の金融策の意義を論じた。また、舟橋・早田の両氏は仕法の対象となる領民の階層について論じられ、紺野氏は仕法中の宇津家財政論を展開されている。諸氏の論点はいずれも仕法の施策内容そのものであるが、その前提たる仕法の請負契約のありかたを論じようとする本稿の当面する課題とは異なる。そこで諸氏の論点についてここで論究することは控え、予定する次稿でそれを果たしたい。

(3) ここで指摘した問題は、通説では、仕法の命を受けた金次郎は、再三辞退したが、慎重に実地取調の上にて、という保留的意義の下に囑託を受け、そのうえで宇津家知行所の盛衰二極の平均数をもって上納限度とすれば十か年後には、現状の二倍ほどまで上納高を引き戻すことができると上申し認められた、としている(全集第十巻、佐々井氏解題四)。この限り仕法の受諾経緯の認識に誤りはない。しかし、何故依頼を固辞したのか、受諾まで交渉する必要があった問題は何であったのか、請負い

時の契約条件の持つ意味は何か。これらの点を厳密に確認することは、以後の宇津家知行所仕法の評価に関わる多くの問題を孕んでいると考えらる。

(4) 「藤原姓宇津氏略系譜」『全集第十卷』一頁。以下、宇津歴代当主についてはこれによる。

(5) 大番組は、平時は江戸城二の丸・西の丸の勤番や江戸市中等の警戒の任に就き、ときには上方在番と称して大阪城・京都二条城の警護に一年交代で勤務することもあった。寛永九年（一六三二）以降一二組の編成となり、これが定制となった。各組に大番頭一人が置かれ、その配下に組頭四人、番士五人、与力一騎、同心二人が付属した。各組を率いる大番頭は寛永期までは万石以上の大名級の者も就く職であったが、その後は上級旗本の有力者が勤めるようになった。幕府軍制組織の中核を占める諸番組（大番・書院番・小姓番・新番）のなかでももっとも格式を誇る職で、旗本のうち布衣（五位以上）の格式を有する者が就任し、側衆・奏者番との交流も盛んであった。

(6) 鈴木壽校訂『御家人分限帳』（日本史料選書23）解題。

(7) 「天保十五年五月 親類書並遠類書控」『全集第十卷』五頁。

(8) 「宇津家采邑仕法発端及結末二係ル要書写」『全集第十卷』八三三頁。

(9) 「元禄十二年 田畑高反別差出帳」『全集第十卷』二八八頁。

(10) 「文政五年年 改正巳年御物成上納帳」『全集第十卷』二一九頁。

(11) 「嘉永元年三月 宇津釺之助書状」『全集第十卷』八三八頁。

(12) その内訳は、「小普請御役金御入用」金八〇両、「大学様御勤諸御入用」金七一両と銀二匁二分六厘五毛、「二季御太刀馬代御入用」金四両、「寛

政十二年十月 大学様御台所御入用月割中勘」『全集第十卷』三一頁。

(13) 「天明元年五月 江戸御借用方控」『全集第十卷』三頁。

(14) 「文政五年年正月 御知行所三か村古今盛衰平均土台帳」『全集第十卷』八三三頁。

(15) 宇津家知行所の収支の不足について、「厳敷御俵約御艱難被成候ても、御收納米金にては年々七八拾金宛御不足、年来 御本家様御助力被進」との記録がある（「文政四巳年八月 御知行所被仰渡書留」『全集第十卷』七九頁）。

(16) 『小田原市史通史編近世』第九章、六四一頁

(17) 二宮金次郎、尊徳は号、天明七年（一七八七）七月二三日、相模国足柄上郡栢山村（神奈川県小田原市）の百姓利右衛門の長男として生まれる。生家は分家とはいえ、二町三反歩ほどの田畑を所持する中堅農家で、母の実家も近郷曾我別所村組頭であり、不足無い環境であった。しかし、まだ幼少の金次郎を予期せぬ悲運が襲った。父母を失い兄弟一家離散の苦難は、後世、高弟富田高慶が著した『報徳記』によって広く知られるところとなっている。懸命な努力の甲斐あって二四歳を迎えた文化七年（一八一）に金次郎の所持地は一町四反歩を回復し生活に余裕が生じた。この年末から家を普請し翌年正月には完成し、父の死から一年余で金次郎は自家再興を成し遂げた。

(18) 台所で使用する薪の使い方を改め、使用量を削減し経費を節約した。また、一日の仕事が済んだあと、夜なべて縄をなうことを奨め、それをもって金を貯め、資金運用をはかることで利得あげ、生活改善に役立てることを奉公人たちに奨め実践させたという。主家の許可を得て行った

ことであるが、通常の武家奉公人ではやらないことである。

(19) 「五常講真木手段金帳」『全集第十四卷』六一頁。

(20) 「桜町領仕法着手に至る事情」『全集第十卷』七八九頁。

(21) 「御知行所被仰渡書」『全集第十卷』七九頁。

(22) 「御知行所被仰渡書」『全集第十卷』七九頁。

(23) 「陣屋詰ら」と複数で表記されたのは、金次郎に同行、赴任した小田原藩士勝保小兵衛の存在があつたためと考えられる。

(24) 「拾ヶ年御物成米永共御趣法御土台金平均帳」『全集第十卷』七九七頁。

(25) 「御分知宇津飢之助様御知行所三ヶ村荒地起返難村旧復之仕法取行方奉伺候書付」『全集第十卷』八三頁。

(26) 小田原藩勝手方の石原五郎左衛門については、小田原藩政に詳しい下重清氏から典拠となる史料ともどもご教示をいただいた。記して謝意を申し上げる。

(27) 『全集第三卷』二頁。

(28) 『全集第十卷』八一頁。

(29) 『全集第十四卷』三三二頁。

(30) 『全集第十卷』八四二頁。

(31) 『全集第十卷』八五二頁。

(考古・日本史学専攻・教授)